

育児に伴う身体技法の変容と母子関係の変化に関する文献的考察

松本亜紀（倫理文化研究センター専門研究員）

はじめに

ジョン・ボウルビィによって提唱された愛着理論によって、乳幼児期の愛着形成がその後の人生を左右する重要な意味を持ち、乳児期からの親子の身体接触やふれあいが親子の愛着形成を促進させるという考えが一般にも広く知られるようになった。日本においても、1990 年以降、子供への虐待問題が顕在化するにつれて関心が高まり、一般の育児書や育児雑誌などにおいてもベビーマッサージなどのタッチケア技法の特集が組まれたり、ベビーマッサージ資格取得の認定講座などを実施する団体も多く誕生するなど、育児において「触れる」ことの重要性が強調されるようになっている。また、平成 27 年に施行された「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」にも、乳幼児期における応答的なスキンシップや、保育教諭らの園児に対する言葉掛けの重要性が明記されている。

しかしながら、東日本大震災（2011 年）を機に、大災害の避難時に幼い子供や介護を必要とする高齢者の運搬方法としておんぶが再評価されるようになってきてはいるものの、身体接触という視点から、おんぶや抱っこといった日本で伝統的に見られた日常的な身体技法（育児技法）を取り上げた研究はそれほど多くない。むしろ、若い親世代のなかには子育てにおいても利便性を重視する価値観が広がっていることから、おんぶや抱っこといった伝統的に日本でみられた身体接触を伴う育児行為を苦手とし、スキンシップをしない母親が増加しているという。

本研究ノートは、育児に伴う身体技法の変容が母子関係に及ぼした影響を明らかにするうえでの予備的考察という位置づけである。これらが、日本においてこれまでどのような視点で研究がなされてきたのかを通覧し、特に近年、おんぶが減少している実態に着目し、その背景にある諸要因について明らかにしたいと考えている。

なお、後述するよう、当該分野の研究がこれまで着目されてこなかったこともあり、出産・育児に伴う身体技法に関する参照すべき先行研究はあまり多くない。しかしながら、文化人類学者の安井眞奈美の論文「おんぶと抱っこの変容」と、小児保健／小児看護学を専門とする原田眞澄の論文「おんぶひもに関する考察」には筆者も学ぶべき点が多く、本稿もこれらの研究に拠るところが大きいことを付記しておく。